

平成 29 年度
入学試験問題

第 2 回

国 語

- 1 問題用紙は監督者^{かんとくしや}の指示があるまで開いてはいけません。
- 2 開始のチャイムが鳴ったら、最初に問題用紙と解答用紙に受験番号と氏名を記入して下さい。
- 3 答えはすべて解答用紙に記入して下さい。
- 4 特に指定のない場合、記述で答える問題は、句読点^{くとうてん}や符号^{ふごう}を一字として数えるものとします。
- 5 問題は 1 ページから 14 ページまであります。

受 験 番 号		氏 名	
------------------	--	------------	--

一 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

生きものとはなにかという問いは、これで決まりという答えはまだありませんし、答えが出るかどうかともよくわからないのですが、イヌとイヌ型ペットロボットを例として考えてみましょう。ロボットは、どんなところをイヌに似せようとしているのかと考える、でもやはり違(ちが)うというところを探してみると、生きものなら必ずもっている他のものにはない特徴(とくちょう)が浮か(う)び上がります。

その一つは、生きものは外から区別されるものになっているということです。実際には膜(まく)で囲(ま)まれているのですが、これは私、これはアリというふうには、それぞれ一つひとつまとまったある形をもっている存在(そんざい)しています。

これはロボットも同じです。イヌ型ペットロボットはイヌの形を真似(まね)ているので、私たちはイヌのように扱(あつか)うわけです。独立して存在するというのは生きものにとつて大切なことですが、これだけではイヌもロボットも同じです。

生きものの特徴は外側と内側がある、つまり自分というものがあり、これがアリですよと決まっているのに、^①ある面から見ると外と内とがつながっているというところ。物質、エネルギー、情報とあらゆる面で外と内とが必ずやりとりをしています。

イヌは水を飲み食べものを食べ、それで自分の体をつくり排泄物(はいせつぶつ)を出す。呼吸により空気中の酸素を取り入れ、二酸化炭素を出す。隣のイヌと情報の交換(こうかん)をしたり、人間ともかかわる。こうして大きくなるなど変化していくわけですが、ロボットは最初から最後まで同じ形で存在しつづけます。イヌのように外とやりとりして変化するものを「開放系」と呼びます。

ロボットは、餌(えさ)を食べたり病気をしたりという面倒(めんどう)なところは抜きにして、人間と関係する情報のやりとりについては、慣れてきたり愛嬌(あいきょう)をふりまいたりするように、つまり開放系になるように努力し、いいとこどりをしています。そうするといかにも生きものっぽくなるけれども、やはり少しずつ育っていく生きものと同じにはなりません。

生きものの場合「代謝(たいたいしや)」といって外から取り入れたものを自分の体の一部にしてしまいます。たとえば食べたイワシのなかに入っているDNAやタンパク質などあらゆる成分を分解して、もう一度そこから自分の皮膚(ひふ)や血液の細胞(さいぼう)のDNAやタンパク質をつくるのです。昨日はイワシの一部として存在していたアミノ酸が、今日は私の一部としてある。ロボットではこうはなりません。

外と内が区別されながらつながっている。さっきまで外にあったものが、自分の体内に入るだけでなく、自分のものになってしまうことがあるのが生きものの特徴です。ですから、外になにかがあるか、外がどうなっているかは、生物にとつてとても大事なことなのです。

外つまり環境(かんきょう)は自分とつながっているのですから、環境問題といつていかに外のことのように扱(あつか)うのでなく、生き方として考える必要があるのです。自然界はけっして安心・安全を保障するようにはできておらず、有害物質もたくさん存在します。自然に対してはつねに気をつけなければなりません、生きるとはどういうことを理解し、^②生きものらしく生きようとすれば、いわゆる環境問題は起きないはずです。

(中略)

自分という確たる存在があることを特徴としながら、変わることも生きものの特徴です。生まれ、成長し、老い、死んでいく……一秒たりとも同じ存在ではありません。

あなたは一生のあいだ、あなたでありつづけます。自分でもそう思っていますし、周囲の人もそう認めています。先ほど書いたように、じつは、昨日食べたイワシを消化して生じたアミノ酸を用いてあなたの皮膚をつくっているのですから、あなたの体をつくる物質はつねに変わっています。それなのに、あなたがあなたであることは変わらない。

③これを支えているのが、あなたの細胞のなかに入っているDNA(ゲノム)です。

(中略)

一生のあいだに成長、老化などの形で変わっていく生きものの特徴を支えるのがゲノムであり、基本は変わらずに、しかも変化をも支えるというみごとなはたらきをしています。一方、環境はつねに変化を引き起こす役割をしています。ゲノムと環境の組み合わせでいまの自分があるわけですから、環境は問題として向きあうものではなく、自分自身をつくり上げるものと考えるべきなのです。

個体だけでなく生きもの全体に目を向けると、進化という形での変化があります。生きものは自分と同じ子孫をつくるのですが、まったく同じものだけが生まれていたのでは、新しい生きものは生まれようがありません。いまから五百万年ほど前に、ヒトという仲間が初めて地球上に登場し、それ以降も少しずつ変化して現代人が生まれたことがわかっていますが、地球上の多様な生きものはすべてこのような変化により生まれてきたわけです。これが進化です。

同じでありながら変わる。変わっても、生きものとしての基本は変わらない。この微妙さが、生きものの生きものたる所以で、ロボットとは違います。

このような特徴をよく知り、その特徴を生かした人間の生き方を考えれば、大量生産・大量廃棄をして環境を汚すような行為は、生きものに合っていないことはおのずとわかるはずです。環境問題といって、温暖化、汚染、環境ホルモン、ゴミ……と一つひとつの事柄を取り上げて、それぞれに対処する方法を考えなくとも、おのずとすべてが生きものにとって望ましい形になるような生き方を探っていきたいのです。

④イヌとペットロボットを比べながら、生きものの特徴を見してきました。一つひとつが大切なものとして存在しているのだけれど、外と強くつながっているのです。どの個体もけっして一つだけでは存在できず、他との関係が大事である。しかも現在だけでなく未来、つまり子孫へのつながりも重要であるということが基本だとわかっていただけたと思います。

ここで、「生きる」という言葉をもう少ししていねいに考えておきます。生きるというなかにも、いくつかのレベルがあるからです。これまでに述べてきたのは「生きる」の基本、つまり「ひたすら生きる」という側面です。とにかく懸命に生きるということ。これは、地球上

のあらゆる生きものがやっている。自分が生き、子孫を残すということです。

そして、ひたすら生きていくうちに、生きものはだんだん生き方が上手になってきました。「たくみに生きる」とでもいいでしょうか。生きものを見ていて、うまくできているなあとか、うまくやっていると嬉しいになることがあるでしょう。

I、私たちの体には免疫能が備わっています。一生暮らしていくあいだには、さまざまな病原体と出会いますが、体はどんなものに会っても、それと闘って体を守るような仕組みをもっているわけです。一生のあいだにどんな敵が来るかわからないのに、どうやってそれに対抗するのかわかりました。私たちの体は百万の敵が来てもよいように、つねにあらゆるものに対応できる細胞をつくりつづけています。もちろん、毎日それだけの外敵が来るわけではありませんから、ほとんどの細胞はムダになります。これほどのムダをしても体を守ろうとしているのです。

II、病原体のほうもその防御をかくぐつて自分を生かす工夫をします。ある眠り病の病原体は、表面のタンパク質を次々と変えます。私たちの体が病原体の表面にあるタンパク質を知ってそれに対抗する抗体をつくった頃には、そのタンパク質が変わってしまったというわけです。急いでそれに対抗しても同じことが続き、結局病原体は厚い防護壁を乗り越えて病気を起こすわけです。エイズウイルスのように免疫能そのものを壊してしまう敵も出てくるのですから、自然界は油断なりません。

III、エイズウイルスは表面のタンパク質を変える名人でもあります。お互いの駆け引きのなかで、ますますたくみが必要になるわけです。

一方「わきまえて生きる」という側面も出てきます。生きものはみな懸命に生き、たくみに生きているけれど、結局ひとり勝ちにはならず、多様な生きものがそれぞれの暮らし方で共に生きることになったと書きました。わきまえて生きる、つまりそれぞれの生きものに「分」というものがあり、それを超えずに生きているので生態系があるのです。

⑤ これまでの科学技術文明は、この「わきまえて」ということを苦手としてきました。できる限り大きくしよう、速くしよう……こうしたやり方は生きものの世界とは合いません。人間だけがのさばらないような生き方を探ることが大事です。

これは人間同士にもいえます。先進国の人だけがエネルギーを使いたいだけ使い、二酸化炭素を放出しているのはわきまえた生き方とはいえません。一つのケーキを十人で分けようとしているときに、ケーキが大好きだからといってほとんどを一人で食べてしまう人はいないでしょう。自分の取り分をわかまえることは本来できるはずですが、機械文明のなかでそれがはずれかけ、自分さえよければよいという気持ちが強くなっているようです。「生きものとして生きる」のなかには、この「わきまえて生きる」が入っています。

(中村桂子『生きもの』感覚で生きる』より)

(注) *愛嬌……にこやかでかわいらしいこと。

*所以……わけ。理由。

※ 問題作成の都合上、文章の一部を省略したところがあります。

問一 ——— ①「ある面から見ると外と内とがつながっている」とはどういうことですか。その説明として最も適当なものを次から選び、

記号で答えなさい。

- ア 生きものは外部の環境かんきょうにじかに接することになる体表と、決して外には触ふれることのない内臓とをあわせ持っているということ。
- イ 生きものはゆるぎない自己を持った強い存在でありながらも、周りの環境に左右されざるを得ない弱い存在でもあるということ。
- ウ 生きものは一見独立して存在しているように見えながらも、生きものの内部と外部環境がやりとりをしているということ。
- エ 生きものは見方によって様々ならえ方が可能であり、内側から見たときと外側から見たときでその特徴とくちょうは変わるということ。

問二 ——— ②「生きものらしく生きようとすれば、いわゆる環境問題かんきょうもんだいは起きないはずです」とありますが、生きものらしく生きようとすれば、なぜ環境問題は起きないのですか。五十字以上六十字以内で説明しなさい。

問三 ——— ③「これ」が指す内容として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア 生きものが自分という存在を持ちながら変化すること。
- イ 食べ物によって自分の体がつくられていること。
- ウ 自分が自分であることに変わりはないと周囲の人が認めていること。
- エ 体をつくる物質は変わりながらも自分が自分であり続けること。

問四 ——— ④「イヌとペットロボットを比べながら、生きものの特徴とくちょうを見てきました」とありますが、次のA～Dの特徴のうち、「イヌ」

だけに当たるものには「1」を、「ペットロボット」だけに当たるものには「2」を、「イヌ」「ペットロボット」の両方に当たるものには「3」を記しなさい。

- A いつでも同じ形で存在しつづける。
- B 外部と情報のやり取りをしながら変化する。
- C 外にあるものを自分の体の一部にする。
- D 一つのまとまった形を持ち、独立している。

問五

I から III に当てはまる語として適当なものを次から選び、それぞれ記号で答えなさい。

ア しかも イ なぜなら ウ たとえば エ つまり オ ところが

問六

—— ⑤ 「これまでの科学技術文明」とありますが、筆者はこれをどのようなものととらえていますか。本文全体をふまえて最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 先進国の人たちだけがエネルギーを使い、地球環境を悪化させる問題を引き起こすものととらえている。

イ 多様な生きものの同士の関係の中で、それらとうまく付き合いつつながらバランスをとるものととらえている。

ウ 一人一人がしたいと思うことだけをして、周囲の人間の間には全く考えることがないものととらえている。

エ なるべく効率的であることを求め、人間にとって便利になることを最優先に考えるものととらえている。

問七

—— ⑥ 「わきまえて生きる」とありますが、生きものが「わきまえて生きる」とはどういうことですか。その説明について述べた四十字以内の部分本文中に求め、最初と最後の七字をぬき出しなさい。

問八

この文章の特徴とくちょうの説明として、適当なものを次から二つ選び、記号で答えなさい。

ア 生きものについての様々な意見を引用することで、筆者の論に深みを持たせている。

イ 生きものという身近なものに焦点しやうてんを当てることで、読者に興味を持たせようとしている。

ウ 生きものとは何かという問いを、イヌとペットロボットを比較ひかくしながら検証している。

エ 生きるということをレベル別に分け、どの生き方が最も望ましいかを明らかにしている。

オ 生きものの本来の生き方を示しながら、現在の人間社会を批判的にとらえている。

二 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

いつものように夜の九時に授業が終了した。ビルの玄関が開き、まっ先に黒いスタジアムジャンパーを着た大介が一人で外に出てきた。競歩のようなスピードで塾から遠ざかる。一度だけ振り返ったが、立ち止まりはしなかった。

大介は今日もまた、紀雄と英二郎に声をかけずに教室を後にした。夕飯も自分の席でさつさと食べた。食べ終わると机にうつぶせて居眠りをした。二人を近づきにくくさせるためだ。

そうまでしたのに、二人は話しかけてきた。

「あの……大ちゃん」

「寝てる？ よね？」

寝ていたら返事をするはずないだろうとつつこみたかったが、寝たふりがばれるので大介はじつとしていた。二人ともあきらめて早く立ち去れと願った。

しかし立ち去るどころか二人は、「紀雄が起こせよ」とか「英二郎が言って」なんて、I 話をいつまでもしていた。しかたないので大介は体を起こし、不機嫌にきいた。

「なにか用かよ」

英二郎が II しながらたずねた。

「あのさ、二十五日のクリスマスに予定ある？」

「なんで？」

あたりに注意をはらい、紀雄が小声で言った。

「^{*}里ちゃんの家でケーキ食べるんだけど、大ちゃんも行く？」

「里ちゃんって、社会の？」

「うん」

大介は久しぶりに英二郎と紀雄を III と見た。二人とも緊張を浮かべ、大介と目を合わせないようにしていた。どちらの顔にも、^①気が乗らないなら無理しなくていいよと大きな文字で書いてある。

「行こうかな」

えっ！ と英二郎が声をあげた。

「マジで？」

大介はむっとした声でききかえした。

「なんだよ。行つたらだめなのか？」

「そんなことないけど……」

② 紀雄が英二郎の肘にそつと触れ、作り笑いを浮かべた。

「じゃあ里ちゃんにそう言つておくれ。それからこのこと、ほかの人には言わないでね」

二人は今度こそ IV と離れていった。大介はまた寝たふりを始めた。

幼稚園から友達ようちえんの紀雄と英二郎に対して、わけのわからないいらだちを大介が感じるようになったのは、四年生の終わりごろだった。あの日気がついた。二人に「なにをして遊ぶ？」とたずねると、返事はいつも同じだと。「なんでもいいよ。大ちゃんがしたいことで」

マツクに行くかこたろうに行くかきく。「どっちでもいいよ」

テレビゲームでのキャラクターをやりたいかきく。「どれでもいいよ」

そんなある日、クラスの女子にからかわれた。

「郷間くんたち三人つてドラえもんみたいだね。郷間君がジャイアンで、永倉くんと原くんがのび太とスネ夫」

大介は心底びっくりした。体が大きいのは認めるにしても、力にものを言わせて二人を従わせているつもりなんて全然なかった。それなのにまわりはそう見るのだ。

紀雄と英二郎をうとましいと初めて感じた。三人でいるのが苦痛になった。二人がおきまりの「なんでもいいよ」を口にすると、かっとして怒鳴りつけたくなる。

野球のために中学受験が決まつてほつとした。放課後に塾に通うようになれば、三人で行動する時間は確実に減る。

ところが紀雄と英二郎も中学受験をすつとて、そろつてえいしん塾に入塾してきた。幼馴染みの三人だけに母親同士の仲も良く、そう決まつたらしかつた。

それから一年以上が過ぎ、大介にとつて都合のよいことに、三人は志望校が一枚も一致しなかつた。三人で行動する必要にせまられるたびに大介はあと少しの辛抱だと自分に言い聞かせていた。できるだけ二人と別行動を心がけてもいた。三月に小学校を卒業すればいやでもばらばらになるのに、いやな態度をとつたりきつい言葉をあびせたりして、幼いころから知っている二人に悲しい顔はさせたくはない。

しかしそれでも時々、自分でも嫌味だと感じる言動を示してしまうことがあつた。さつきのクリスマスパーティーがいい例だ。行きたい気なんてさらさらなのに、おびえた顔の二人を見ていたら、いらだちがこみあげて、行くとなざと答えてしまった。

大きな歩幅はばで急いだおかげで、いつもよりずっと早く自宅に着いた。庭先で飼っているボーダーコリーのマッキーと少し遊んでから家に入った。たたきに女性用にしては大きな革靴かわぐつがそろえてある。姉の由利子ゆりこが帰つていようだ。

思ったとおり、由利子がリビングのソファに百七十五センチの長身を横たえて、テレビを見ながらゴマせんべいを食べていた。大介を見て陽気に笑った。

「お帰り！ おつかれ！ おみやげあるよ」

母が冷蔵庫から出してきたおみやげのプリンを、大介はまたたくまに二個たいらげた。みごとな食べっぷりを由利子は頼もしそうに見つめ、あれ？ という顔で大介の顔に手をのばした。

「あんだ、ひげが生えてきたんじゃないの？」

大介はその手を邪険にはらいのけた。由利子は「お年頃なのね。青春青春」と言つて愉快そうに笑った。

由利子は防衛大学の二年生で、普段はペリー来航で有名な浦賀の大学寮で暮らしており、週末を利用して時々帰ってくる。中学高校の六年をバレー部で活躍した体育会系の体が、大学に入ってから始めた空手のおかげでよけいにたくましくなり、そのへんの男子大学生よりよっぽどがっしりしている。

由利子が防衛大に進学したいと言いだしたとき、大介の家ではちよつとした悶着があつた。父は不機嫌になり、母は泣いた。

「普通の大学じゃ、どうしていけないんだ」

「子どもを戦争に行かせたい親がどこにいるの」

そんな両親を由利子は辛抱強く説得した。

「人の役に立つ仕事がしたいの。」

A

で働きたい」

ようやく許しを得ると猛勉強を始め、超狭き門を突破し、晴れて防衛大学の制服に袖とおした。入学式に校門の前で晴れがましい笑顔を浮かべた由利子と両親の写真が、リビングの壁に飾つてある。

「青春青春つてうるせえよ。自分はお年頃を通り越して、もうおばさんだろ」

「なに！ 今、なんて言った！」

「おばさんつて言ったんだよ」

「うら若き乙女にむかつて失礼な！ 大介、こつちにきて正座！」

由利子のわめき声に笑いながら、大介は三個めのプリンを手に勉強部屋に入った。

数十分後、塾の宿題をしていると、ドアがノックされて、由利子が赤い紙袋を持って入ってきた。

「大介、ちよつと早いけどクリスマスプレゼントあげる。クリスマスは友達とスキーに行く予定だから」

プレゼントは深緑色のカシミアのマフラーだった。大介は首に巻いてみた。ふわふわ軽くて暖かい。

「高かったんじゃないの？」

「へへ、大学からボーナスもらえたからね」

由利子が机の上の問題集に目をおとした。とたんに顔をしかめた。^④

「むずかしい。中学受験ってこんなのやるんだ」

大介から離れると、床にあつたプロ野球の雑誌を拾い上げ、ベッドにすわってぺらぺらめくった。

「合格できそうなの？」

「たぶん」

「それならよかった。あんたもついに夢にむかつて第一歩を踏み出すんだね」

「今のうちにサインしてやろうか」

大介が中学受験をする理由は単純明快だった。幼い頃から野球が大好きで、どうしても甲子園に出たい。だから強豪校のR学園に中学から入学して腕を鍛えたい。悶着どころか家族じゅうがもろ手をあげて賛成した。

来シーズンのプロ野球の記事を熱心に読む由利子に、大介が話しかけた。

「大学、楽しい？」

「まあね。がんばって入ったし満足してるよ」

「卒業したら自衛隊に入るの？」

「まだ決めてない。ヘリコプターのパイロットが、かつこいいなとは思ってる」

「ヘリコプターのパイロット？ 女なの？」

^⑤ 由利子はボタンと音をたてて雑誌を閉じた。

「あのね、飛行機の整備をしたり機雷とか不発弾を処理したりする女性隊員もいるんだから。野球界だって十年もたったら、女の選手が活躍してるかもしれないよ」

まさかと笑いながら、大介は少し意地の悪い質問をした。^⑥

「もしも戦争に行けって命令されたらどうする？」

「自衛官になったら行くだろうね」

迷いのない由利子の声に、大介は言葉をなくした。テレビのニュースで見た迷彩色の軍服に身を包んで銃をかまえる外国の兵士の姿が頭に浮かんでくる。

「……それ、マジで言ってるの？」

「うん」

「親が泣くよ」

由利子は立ちあがり、壁に貼った写真に目をこらした。大介が以前に所属していた少年野球チームの集合写真で、バックネットを背に白いユニフォームを着た選手たちが笑顔を浮かべている。

「ねえ、知ってる？ 自衛隊が戦争に行くかどうかを決めるのは、日本の国民なんだよ。だって自衛隊に出動命令を下すのは総理大臣だもん。総理大臣って日本国民にもっとも多く支持された政党の総裁でしょ？ つまり日本国民の意見を一番代表する人」

「それはそうだろうけどさ、だからって別に由利が行かなくてもいいじゃん。だれかほかの人に行ってもらおうとか……」
言葉が途切れてしまった大介を安心させるように、由利子は立ちあがると、大介の肩をほんぽんとたたいた。

「まだ自衛官になるって決めてないよ。まあ、なるにしろならないにしろ、人とながりを持てる仕事がしたいんだよね。この人たちのためにもっともつとがんばろうって思えるような。そのために防衛大でいろんな技術を身につけておきたいし、勉強をがんばるつもり」

由利子は「あんまり無理しないでちゃんと寝なさいよ」と言い残して部屋から出ていった。首にマフラーを巻いたまま、大介は閉まったドアを見つめた。由利子が心配で胸が重苦しく、ため息をもらした。大介のR学園受験を真つ先に賛成し、だれよりも応援してくれたのは由利子だった。キャッチボールやランニングにも気軽につきあってくれた。大好きなその姉が、二度と会えないかもしれない場所に行くとしたら、見送るときにどんなにづらいだろう。

⑦ 特大のため息がまた出た。「寝よ」とつぶやいて大介はマフラーを床に落とし、服を着たままベッドに入った。

(岡田依世子「ぼくらが大人になる日まで」より)

(注) *里ちゃん……塾で社会科を教えている先生のニックネーム。

*こたろう……大介たち三人がよく行く駄菓子屋の名前。

*防衛大学校……陸・海・空の自衛隊の幹部自衛官になるために教育を受ける学校のこと。一般的な大学とは大きく異なり、厳しい規則や訓練がある一方で、学費は無料で給料ももらうことができる。本文中の「ポータス」はこの給料のうちの一つ。

問一

I から

IV

に入る言葉として適当なものを次から選び、それぞれ記号で答えなさい。

A そそくさ

I いそいそ

ウ びくびく

E そわそわ

オ ひそひそ

カ まじまじ

問二 ——— ①「行こうかな」とありますが、大介がこのような返事をしたのはなぜですか。その理由として最も適当なものを次から選び、

記号で答えなさい。

- ア 中学受験に向けての単調な生活にそろそろ飽きてきて、少しは日常に楽しみを求めたいと考えたため。
- イ おびえた二人の様子にいらいらし、全く行く気もないのに行くこと答えて二人を困らせようとしたため。
- ウ 無理はしなくていいとあからさまに表情に出す二人を、退屈のぎにからかってやろうと思ったため。
- エ 行く気などないが、自分が行くと返答することで二人がどのような反応を示すか確かめたかったため。

問三 ——— ②「紀雄が英二郎の肘にそつと触れ、作り笑いを浮かべた」とありますが、この時の紀雄の気持ちの説明として最も適当な

ものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア 大介は自分達のことを嫌っていると確信していたので、パーティーに来ることへの驚きを隠そうとしている。
- イ 大介とこのまま話し続けると余計に機嫌を損ねてしまいそうだったので、早めに話を切り上げようとしている。
- ウ 大介が来るという返事をしたので、一度英二郎と二人になって大介をあきらめさせる作戦を立てようとしている。
- エ 大介がパーティーに来ることが決定してしまい落ち込んだが、その嫌な気持ち顔に表れないようごまかしている。

問四 ~~~~~ a「邪険に」、~~~~~ b「もろ手をあげて」の本文中での意味として最も適当なものを次から選び、それぞれ記号で答えなさい。

a 邪険に

- ア 反射的に
- イ いきおいよく
- ウ 冷たく乱暴に
- エ 注意深く

b もろ手をあげて

- ア 心から喜んで
- イ 意見を出し合って
- ウ 考えに考えを重ねて
- エ 最終的にはまとまって

問五

A

に入る言葉として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア 男とか女とか関係ない、自分の実力で活躍できるところ
- イ 普通の仕事ではない、戦闘能力が必要とされるところ
- ウ 学力は問われない、腕力だけで勝負ができるところ
- エ 体格では差がつかない、頭脳が最も評価されるどころ

問六

③ 「入学式に校門の前で晴れがましい笑顔を浮かべた由利子と両親の写真が、リビングの壁に飾ってある」とありますが、ここから読み取れる両親の思いの説明として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア いつか由利子が戦争に行くかもしれないという危機感を常に持とうとしている。
- イ 最終的に由利子の希望を許してしまったやりきれなさを忘れないようにしている。
- ウ 家を訪れる様々な人たちに超難関を突破し夢を実現させた娘を誇ろうとしている。
- エ 今では娘の将来への強い思いを認め入学してからも彼女を応援しようとしている。

問七

④ 「顔をしかめた」とありますが、次のうちで□の中に「顔」の入らないものを一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 私はみんなの前で恥をかき、□から火が出そうだった。
- イ 僕は昔世話になった彼に、いつまでも□が上がらない。
- ウ 彼女は誰とでもすぐ打ち解けるため、□が広い。
- エ 彼は先輩の□を立てるため、自分の手がらを譲った。

問八

——⑤「由利子はボタンと音をたてて雑誌を閉じた」とありますが、この前と後で由利子の大介への態度はどのように変化していきますか。その説明として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア それまでは他愛もない会話をしていたが、弟が性別で職業の向き不向きを判断しようとしていると知り、自分の思いを真剣しんけんに伝えようとしている。

イ それまでは兄弟ならではの軽い会話を続けていたが、あまりにも世間のことを知らない弟にあきれ、弟が理解できるように社会のしくみを語ろうとしている。

ウ それまでは弟をからかうようなことばかり言っていたが、弟が本気で自衛隊入りを反対していることに気づき、なんとか自分の気持ちを理解してもらおうとしている。

エ それまでは自分の将来についての話をはぐらかしていたが、弟の質問をきっかけに、自衛官になるという固い決意を打ち明けようとしている。

問九

——⑥「大介は少し意地の悪い質問をした」とありますが、大介の質問はなぜ意地が悪いのですか。その理由として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 戦争には怖こわくて行けないであろう由利子に、自衛官になる資格などないということを自分自身で気づかせたかったから。

イ 野球界で女性選手が活躍かつやくすることなどありえないということを、戦争を引き合いに出して思い知らせようとしたから。

ウ 女性でもいろんなことができると話した由利子が、戦争に行けるかという問いにはためらうだろうと予測したから。

エ 命を落としかねない戦争という事例を出すことで、大学でがんばっている由利子の決心をくつがえそうとしたから。

問十

——⑦「特大のため息がまた出た」とありますが、この時の大介の気持ちを、「ため息が『また』出た」という表現に注意して、四十字以上五十字以内で答えなさい。

三 次の①～⑧の——部のカタカナを漢字になおし、⑨～⑫の——部の漢字の読み方をひらがなで書きなさい。

- ① 理由をメイジする。
- ② ミジユクな若者。
- ③ 風邪かせにキク薬だ。
- ④ オクマン長者になる。
- ⑤ 世界イサンに認定する。
- ⑥ カブトムシのヒヨウホンを作る。
- ⑦ シュシヤせんたく選択。
- ⑧ スコやかな成長を願う。
- ⑨ 父の教えに背く。
- ⑩ 声色せいしきを変える。
- ⑪ 雑木林を散歩する。
- ⑫ 風情のある旅館。

